

仙台大学 広報室

Monthly Report

中国 遼寧省 瀋陽師範大学への出張報告



朴澤理事長と賈玉明副書記(右)

平成27年9月23日からの5日間、中国遼寧省の瀋陽師範大学と国際交流に関する打合せを行ってまいりました。当大学と仙台大学とは、平成20年に国際交流に関する協定を締結しており、今回は、学部学生の相互交流（留学）の更なる拡大、及び新たな共同研究の可能性検討、幼児体育に関する意見交換について話し合いがもたれました。

1) 学生の相互交流（留学）

仙台大学から瀋陽師範大学への留学生派遣については中国武術学習を中心としたプログラムを、先方から仙台大学への留学生派遣については日本語・日本文化習得を中心としたプログラムを、人数枠を拡大する方向で検討していくことになりました。

2) 共同研究

現在、仙台大学と中国青海省体育科学研究所で進めている研究の一部をベースに、仙台大学と瀋陽師範大学とで新たなテーマを検討することとしました。

3) 幼児体育

先方の附属幼稚園（園児数330人）の見学を行い、幼児体育に関する意見交換を行いました。

< 目 次 >

中国 遼寧省 瀋陽師範大学への出張報告	1
「大和証券福祉財団」から助成金を授与—仙台大学災害ボランティア活動	2
第21回ハワイ大学アスレティックトレーナー研修修了	3
山の厳しさと優しさを学んだキャンプ実習	4
高校生のための仙台大学「教師塾」の実施	5
驚き、大学の治安確保に活躍する大学警察！ 遠藤教授のスタンフォード大学探訪	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関
にも旬な話題を提供していきたいと考えて
おります。

本誌へのご意見・ご質問等がございま
したら、広報室までご一報ください。

広報室

TEL 0224-55-1802

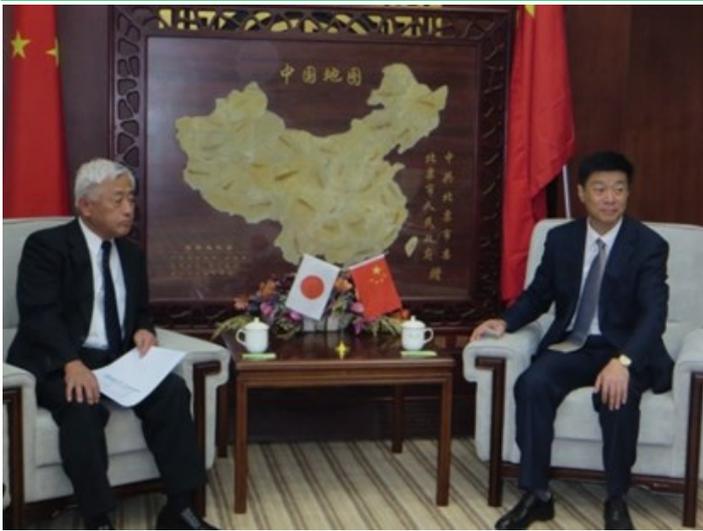
FAX 0224-57-2769

Email: kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り

"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017 SENDAI Since 1967
UNIVERSITY

SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に～



朴澤理事長と林群学長（右）



朴澤理事長と趙大宇前学長（右）

尚、瀋陽師範大学の賈 玉明 副書記は、10月29日（木）に国際交流促進に関する合意書締結のため、本学に来学される予定です。また、9月14日～9月27日の2週間、仙台大学現代武道学科から2名の学生が瀋陽師範大学へ短期留学しております。瀋陽師範大学への今回の留学は仙台大学初の事業であり、斎藤現代武道学科長はじめ、荒井国際交流センター長、事業戦略室等の関連教職員のご尽力と、前向きで食欲に未知なるものを吸収しようとする学生の努力により達成されたものです。いずれこの報告は10月末のマスリーレポートで馬佳濛講師より報告される予定です。

＜報 告：スポーツ健康科学研究実践機構 事務課長 近江康宏＞

「大和証券福祉財団」から助成金を授与—仙台大学災害ボランティア活動



「大和証券福祉財団」から目録と贈呈書が手渡された＝大和証券仙台支店

9月2日（水）、大和証券仙台支店（仙台市青葉区）において、東日本大震災の被災者支援のための継続的なボランティア活動を行なっている団体に対する「第5回災害時ボランティア活動助成」贈呈式が開催されました。この活動助成は、「大和証券福祉財団」が災害ボランティア助成として東日本大震災の発生した年に新設し、今年で5年目の事業。今年度は、全国66件の応募の中から審査を経て、本学を含め24団体が採択を受けました。贈呈式には、本学を代表して、仙台大学スポーツ科学研究実践機構の齋藤まり【写真中央】・柳澤麻里子【右から2人目】・松浦里紗【右端】の各新助手が出席し、大和証券仙台支店の田所俊弥支店長から目録（助成金50万円）と贈呈書が手渡されました。

贈呈式で審査に当たった同財団の安藤雄太選考委員長【左から2人目】は、「皆さんが活動の中で積み上げてきた知恵と経験を活かして、今後も被災地の新たな支援の可能性を探ってほしい」と述べられました。贈呈式終了後には、授与された団体の活動紹介がなされ、本学の齋藤新助手は「助成金を活用させて頂き、さらに廃用症候群予防及びコミュニティの再構築を目的とした運動教室や健康支援活動を発展させ継続して行なっていきたい」と話しました。

なお、本学は「第3回災害時ボランティア活動助成」（2013年度）でも同財団から活動助成を受け、今回で2回目となる活動助成金を授与されることになりました。



「第5回災害時ボランティア活動助成」贈呈式後の集合写真

第21回ハワイ大学アスレティックトレーナー研修修了



修了証を手に記念撮影する参加学生たち＝ハワイ大学

平成27年8月30日～9月6日の期間において、ハワイ大学でアスレティックトレーナー(AT)研修アドバンスコースが行われた。AT研修アドバンスコースはベーシックコースでアメリカにおけるスポーツ文化などを学んだ後に、よりアスレティックトレーナーに興味がある学生向けのプログラムとなっている。研修の最大の魅力は献体解剖の見学実習である。既に全米公認アスレティックトレーナーの資格(NATABOC-ATC)を合格し、修士課程で学ぶハワイ大学の学生たちに混ぜてもらいながら、献体解剖の体験を行った。ハワイ大学医学部では、献体解剖で使用する献体は全て、生前の本人の協力意思を基に成り立っている。献体解剖の様子を見学する事も刺激的だが、各献体には生前の名前や職業、持病などが記されており、献体が提供されて初めて医学の勉強が成り立つという仕組みについても学ぶ事ができる。

今研修での新たな取り組みは、参加学生がハワイ大学学生寮に宿泊した事である。従来のハワイ研修ではホテルに宿泊していたが、コスト削減と現地学生との交流や留学模擬体験などの理由から寮滞在を実施した。ハワイ大学キャンパス内に所在するリンカーンホールはとてもきれいな建物で、良く管理が行き届いている。二人部屋が一泊約\$35(¥4200程度)ととても安価である。安全対策も講じられており、入口ではカードキーが無いと建物に入れないようになっている。何もかも提供されるホテルに滞在するよりは、大学内の施設に宿泊し、留学時と同様な体験をする事でとても良い経験となったのではないだろうか。



ATの専門的な内容だけに留まらず、海外留学で必須になる英語能力向上もこのプログラムの目的の一つである。2時間程度の英会話のレッスンが2度組み込まれており、さらに現地でATを目指す大学生との交流会も行った。英語の自己紹介や参加学生が準備してきた質問などをする機会の中で、同年代の学生と英語でコミュニケーションを図るといったチャレンジを通し英語能力を向上するきっかけ作りも行った。日本人が持つ英語に対する苦手意識克服を目的としており、それが英会話講師の口癖である「English is EASY!!!」という言葉からもくみ取れる。

ハワイ大学のAT研修も今年で12年21回目となる。昨年度に調印されたハワイ大学教育学部KRS学科との提携により、このAT研修も大きく発展をしようとしている。以前と比べ、プログラムの担当者がNATABOC-ATCという事もあり本学参加学生の希望に合わせてプログラム内容も微調整してくださっている。この研修は、参加学生に対し、政府からの奨学金支給などもあり、かなり安価で有意義な体験が出来る。今後もより良いプログラムを構築出来るよう、一層ハワイ大学との連携を深めていきたい。

<報告:助教 白幡恭子>



山の厳しさと優しさを学んだキャンプ実習



平成27年度の集中授業「キャンプ」が、宮城県白石市「南蔵王野営場（国立花山青少年自然の家管轄施設）」にて行われた。第一団は9月3日～6日、第二団は9月7日～10日、それぞれ3泊4日の日程で実施された。実習生は、6～7名の男女学科部活混成班に振り分けられ、野外生活や沢登り、登山に取り組んだ。それぞれの班にはキャンプカウンセラーとして補助学生（本学3～4年生）が一人ずつつき、実習生と生活を共にしながら、野外活動の指導にあたった。

第一団は天気にも恵まれ、非常に快適なキャンプとなった。南蔵王野営場でキャンプをスタートさせてから今年で4年目となるが、最も天気がよかったと言える。何年も帯同している教員も、あれだけ登山で晴れたことはなかったと言ってよいくらい景色もよく、気持ちよく歩くことができた。しかしながら、活動時の怪我やハチ刺され、道迷いなどの野外活動特有のトラブルも少なからず発生したキャンプであった。



その際は、実習生もスタッフも協力して問題解決にあたることができ、トラブルの時にどのように対応すればよいかを学ぶ機会にもなった。雨具などの装備不備者が一人もおらず、大きな怪我や事故もなく、すべてのプログラムも予定通り終えることができたことは、大きな成果であった。

第二団では一転、大雨のキャンプとなった。初日から、雨が降る中テントを濡らさないように設営することが求められ、どの班も苦戦を強いられた。2日目になると雨の生活にも慣れ、雨にも負けない体育大生らしい様子が見られるようになった。そして3日目の登山は、安全を考慮し、短縮コースで実施した。雨の中、どの班も仲間と協力しあい、水引入道（山頂）を目指した。山の厳しさに揉まれる中で、自分自身や仲間と向き合った実習生も多かっただろう。登山後は、雨の日の特別プログラム「カレーコンテスト」が行われ、かぼちゃを器代わりにしたドライカレーが優勝を飾った。最後の最後まで雨続きの第二団だったが、だからこそよく考えよく工夫し、仲間を思いやることができたのではないだろうか。



最後に、今回のキャンプ実習も、補助学生たちが大いに活躍してくれた。大学院生TAや、普段から野外活動に取り組んでいる4年生が中心となって結成された今年の補助学生チームは、過去4年の中で最もレベルが高く、キャンプ中にも様々な成長を見せてくれた。実習生にとってもよい経験ができるが、補助学生はさらに有意義な体験をできるのがキャンプ実習である。再来年、より多くの実習生が補助学生になってキャンプ実習に戻ってきてくれることを願っている。

<記事・写真：岡田成弘講師提供>



「放課後先生」開始式—教員志望の仙台大生を学校現場に派遣



「放課後先生」開始式の集合写真＝船岡小学校

9月7日（月）、柴田町立船岡小学校で「放課後先生」開始式が行なわれました。開始式には、本学からは阿部芳吉学長【写真前列中央】・青沼一民教授（教職支援センター長）【左から2人目】・久能和夫教授【左端】及び教員志望の仙台大生10名が、柴田町の小中学校からは青田穰校長（船岡中学校長／柴田町校長会会長）【右から2人目】・鈴木均校長（船岡小学校長）【右端】が出席されました。

「放課後先生」の事業目的は、文化のまち・教育のまち「しばた」の教育資産（仙台大学）の活用を図り、児童生徒の学力や体力・運動スキル向上と仙台大学と柴田町の小中学校の交流を図ること。

柴田町の小中学校9校に教員志望の仙台大生が出向き、放課後を利用した児童生徒への学習支援を行なうことにより、体力・運動スキルの向上が見込まれます。また、仙台大生は、指導スキルの向上が期待されます。

阿部学長は「知・徳・体の三拍子揃った子どもたちを育成するために、仙台大学の力を結集してお手伝いをしたい。柴田町の特色ある教育の実現に向けて取り組んでいきたい」と話され、船岡小学校の鈴木校長は「仙台大生は学校現場の生の様子を肌で感じ、児童生徒との交流を深め、実践経験を積んでもらいたい。仙台大学とはWin Winの関係を構築したい」と述べられました。

たなかりさ
教員志望の仙台大生を代表して、田中理沙さん（体育学科4年—青森南高校出身）は「今日集まった仙台大生は、教師になりたい気持ちが一歩強い学生たちです。机上だけではなく、体育系大学の学生として、運動面でもお役に立てるよう努めたいと思います」と抱負を話しました。

なお、「放課後先生」は、柴田町の小中学校9校のうち、柴田小学校と船迫中学校は本年度当初から先行して実施しています。9月から船岡小学校を含む残り7校でも開始します。

高校生のための仙台大学「教師塾」の実施



学長講話



バレーボール実技指導



柔道実技指導



剣道実技指導

平成27年9月12日（土）9:00から15:00まで、「教師になろう」という高い志をもつ高校生に対し、その思いの実現に向けた教育活動を支援する目的で『高校生のための仙台大学「教師塾」』を開催しました。

当日は、明成高校や柴田高校など県内10校から36名の高校生の参加があり、午前に講義、午後には体育実技（バレーボール、剣道・柔道）を行いました。午前の講義は、阿部学長の「先生の魅力とは何か」と題した講話、山谷教授から『「教える」ってどんなこと』、志賀野教授から「教師になるには」と題した2つの講座を行いました。

教師の概念や魅力、教育の重要性、教師になるための資格など教員養成の現状等について幅広くお話いただきました。午後は、川村学生課長がバレーボール、井上教授が剣道、仲田助教が柔道を各競技の基本や教員採用試験の実技試験の内容を取り入れて実施しました。当日は宮城県・仙台市の教員採用二次試験が実施されているというタイムリーな催しになり、実技の実施にあたっては、述べ11名の学生がボランティアで指導補助にあっていただきました。また、お昼は学生食堂で教員や学生ボランティアと一緒に昼食懇談会を行い、仙台大学での生活の一端を経験していただきました。受講生からは、「教員への志向が高まった」、「教員の職務の一端を体験が体験できてよかった」などの感想が寄せられ、特に午後の体育実技においては、教員採用試験の実技試験の内容を取り入れて実施したため、高校生にとっては「普段体験できない貴重な取組みとなり、充実した一日であった」との感想を多数いただきました。

今後も、教職支援センターでは教職を志す高校生への支援の充実を図っていくこととしています。

＜報告：仙台大学教職支援センター＞

カール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクとの交換留学生が来訪



左から荒井センター長・阿部学長・ピアさん・小松教授・渡邊室長
＝学長室

9月16日（水）、本学と国際交流協定を締結しているドイツのカール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクから、交換留学生のピア・カタリナ・フローベルクさん（人間科学部体育学科2年）が、荒井龍弥国際交流センター長及び小松恵一教授（国際交流センター委員・ドイツ担当）、渡邊一郎事業戦略室長と共に学長室を訪れました。ピアさんは、平成27年9月から平成28年3月までの半年間、学部の科目等履修生として学びます。

阿部芳吉学長は「早く仙台大学と日本の環境に慣れ、半年間有意義に過ごしてほしい」と挨拶。ピアさんは「日本文化と日本語を学びたいです。特に、日本人がスポーツをどのように教え・教えられ・訓練されているかを知りたいです。将来は日本での留学経験を生かし、ドイツの大学でスポーツ科学を教えたいと思っています」と意欲的に話しました。小松教授は「積極的に仙台大生や他の留学生たちと交流し、友達をたくさん作ってほしい。日本の教育やスポーツ科学の知識を得て、自分のキャリア形成に生かしてほしい」と期待の言葉を述べられました。

カール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクは、教育大学を前身に1973年に設立されたドイツでは新しい大学です。平成22年2月22日に、本学はドイツの大学では初の国際交流協定を締結しました。平成24年度に本学学生1名が同大学に1年間留学し、平成25年度には同大学より半年間1名の留学生を本学で受け入れました。平成26年度には、学術交流として「現代の系譜学」をテーマに本学においてワークショップを開催しました。今後も、同大学の体育学科を中心に教育・研究や活発な学生間交流を進めていきます。

台湾の台東大学から留学生が来訪



左から陳居賢さん、林さん、阿部学長、陳律慈さん、呉さん、王さん、渡邊室長
＝学長室

9月17日（木）、国際交流提携校の台東大学（台湾）からの留学生4名が、本学事業戦略室の渡邊一郎室長・台東大学から本学へ留学中（ダブルディグリー制度により本学の学位を取得中）の林彦宇さんと共に、学長室を訪れました。阿部芳吉学長は「病気や怪我が一番心配。疑問に思ったことや困ったことがあれば何でも相談に応じます。しっかり日本語を修得して、楽しく充実した留学生活を送ってください」と励ましの言葉を述べられました。

台東大学と仙台大学の両大学の学位取得をダブルディグリー制度により目指す陳律慈さん（柔道台湾代表）は、「日本語・日本文化・日本のスポーツ科学を学び、自分の世界を広げたいと思います。特に、日本の柔道を学びたいです。仙台大学の柔道部に入部したいと思っています」と抱負を話しました。

1年間、学部の科目等履修生として学ぶ3名は、「高校の体育教師を目指しています。日本の空手道の技術と精神を習得し、将来にも繋げていきたいです」（呉宇晴さん／空手道台湾代表）。「日本語と剣道を学びたいです。将来はツアーコンダクターになって、日本と台湾の橋渡し役になりたいです」（王嵐さん）。「アウトドアスポーツに興味があります。台湾では雪が降らないので、スキーが楽しみ」（陳律慈さん）と留学への意気込みを話しました。

なお、本学では、台湾・台東大学の他に、スポーツ科学を中心とした分野で、中国や韓国・アメリカ・ドイツ・フィンランド・タイ・ベトナム等の世界各国の大学と交流を行なっています。



仙台大学同窓会—新潟・東海・広島の三支部が同日開催(2015.9.12)



新潟支部の報告

新潟支部同窓会を直江津駅前の「まるちゃん」で開催しました。7月に下越の会が開かれていた関係で参加者は少なかったですが、久々の上越開催でもあり、大いに盛り上がりました。また、大学からは同窓会長、学長がご参加くださり、同窓会の進む方向と仙台大学の現状を知ることができました。50周年記念に向けて、次回は工夫を加え、多くの同窓生で支部会を行いたいと考えております。

＜新潟支部事務局長 小林直樹＞

東海支部の報告

会を重ねること15回（特別開催を含めると17回）の当同窓会は、全国の数ある支部会で突出した伝統と実績を自負しますが、実態はまだまだ難問山積です。しかし、400名余の同窓生と交信可能な状況と、100名の出欠席連絡「はがき」は心強く、会の発展に大きな力になるものと確信しております。

さて、名古屋の中心地にある「ホテル・メルパルク」で開催された今年度の同窓会では、15周年記念講演として、バンクーバーオリンピックの悪夢を乗り越え、見事にソチオリンピックに連続出場した私達の仲間、小室 希氏（仙台大学特別研究員）をお招きしました。小室氏によるご講演は、大好評で、世界で活躍した同窓生を囲み、宴は盛り上がりました。今回の参加者は、常連とされる方に加えて懐かしい方々が多かったこと、更に初めて参加してくれた同窓生もあり、実に和やかな会に終始しました。二次会は、夜の名古屋の代名詞「錦三」・・・錦三丁目に繰り出しました。誠に愉快的な夜で、至福の一時を過ごした方々は、その余韻に浸っていることでしょう。

最後に母校仙台大学の隆盛と、同窓会の益々のご発展を心から祈念申し上げます。

＜東海支部長 松下邦雄＞



広島支部の報告

仙台大学広島支部同窓会が広島市中区八丁堀で開催されました。現在、広島には、50名を超える卒業生がおり、この日は11期から41期の14名が参加しました。最初に同窓会本部事務局長・大河原先生のご指導のもと総会が行われ、現在の大学の様子や支部の在り方についてご説明いただきました。懇親会の開会は、上村知令様（11期・剣道部）にご挨拶と乾杯の音頭をご担当いただきました。会が進むにつれ、心は一気に大学生に戻り、みなさん当時の思い出話を花を咲かせていたようです。全員で同窓会旗の前で記念写真を撮り、最後に校歌や応援歌を大合唱。締め乾杯は大前浩昭様（13期・陸上部長距離）にご担当いただき、盛況のうちに閉会いたしました。

＜広島支部 中奥岳生＞

広島は30数年ぶりと言うことで、広島同窓生50人中14人参加し、皆さんだいぶ心待ちにしていたようです。部活動つながりで再会を懐かしんだり、初めての顔合わせでも話題の中心は大学生活、先生方のエピソードで盛り上がり、最初から皆さんの笑顔があふれてとても良い雰囲気でした。最後は支部長が印刷してきた「校歌、学歌、仙大の力、第一応援歌、第二応援歌」を、居酒屋の中でみんなで声高らかに歌いあげました。これまで各支部同窓会に出席してきましたが、こんなに皆さんが覚えていて歌ったのは初めてでとても感心しました。最後は肩をくんで輪を作り、エールをして、おひらきとなりました。参加者全員が異口同音に、楽しかった、ぜひ来年もということで大変な盛会でした。

引き続きの2次会も、酒のつまみに出てきた広島特有のものなのか・小イワシの天ぷら・エイのひれ・ハゲのさしみ（たれはボン酢に肝、ネギ、大根の紅葉おろしを入れたもの）、アサリ蒸しなどとても美味しくいただきました。

広島支部の皆さん、とてもすてきな夜を満喫させていただきました。これを機会に毎年開かれると良いですね。期待しています。

＜同窓会事務局 大河原則夫＞

イタリアスポーツ教育協会 (AISE) での柔道研修 ～ 被災地の柔道家支援として5年目の招待 ～



故バリオーリ氏のメッセージと嘉納治五郎に関する執筆本を手に

7月16日～7月29日、本学柔道部大枝郁美さん（体育学科4年・水戸葵陵高校出身）と田中千裕さん（体育学科3年・岐阜県鶯谷高校出身）がイタリアのプレダッピオ市ビラサルタにある合宿所において柔道合宿に参加しました。

この研修は、イタリアスポーツ教育協会（AISE）故チェザーレ・バリオーリ氏が、東日本大震災で被災した、日本の若い世代の柔道家をイタリアへ招待し勇気づけたいと女子柔道オリンピック金メダリストの谷本歩実さんを通じ打診があったことにあります。かねてから谷本さんと交流の深い本学柔道部の南條和恵女子監督に声掛けがあり、そのご縁で参加させていただくことになりました。震災のあった2011年から数えると今年で5年目となります。バリオーリ氏亡き後も、遺志を受け継ぐ形で、バリオーリ先生の奥様イヴァーナさんやお弟子さんたちが中心に継続し、無償で被災地唯一の体育大学である本学の柔道部の学生を招待し続けて下さっています。

合宿では、イタリア各地にあるAISEの道場へ通う10代から50代の様々な年代の男女約20名が参加しており、Ciao!と陽気な挨拶でイタリアの柔道家のみなさんに温かな雰囲気の中で迎えられ、屋外にあるビラサルタの柔道場で今



稽古後の様子

年もAISEに通う様々な団体とともに、ウォームアップに体の俊敏さを競ったゲームを取り入れていたり、技の研究、ミーティングなどでの意見交換など、様々な稽古が行われました。終盤の2日間ほどは、シチリアチームが合流し18歳の60キロ級柔道イタリアチャンピオンと稽古をする機会に恵まれて、沢山の貴重な経験をさせていただきました。

また、古武道や空手、合気道など日本古来の「武道」をトレーニングに取り入れ、一つ一つの技の研究なども熱心に取り組みながら、日本柔道を吸収しようとする二人からも真剣に学び取ろうとする姿勢にとっても感銘を受けたそうで、帰国する際には、バリオーリ先生が執筆した嘉納治五郎先生の生涯をまとめたイタリア語版の本や、最後に遺したバリオーリ先生のメッセージなどが手渡され、ぜひ原語で拝読したいと思ったそうです。

これまでの5回にわたる、仙台大学柔道部の学生への柔道研修を通じ、沢山のご支援をいただいたことに感謝しながらAISEの皆さんに何等かの御恩返しをしたいと思います。これまでの研修での学びを報告してくれました。

大枝郁美さん

（体育学科4年・水戸葵陵高校出身）

稽古の後に集まり行われるミーティングにおいて、柔道に対する自分の考えを聞かれ、片言の英語で自分の気持ちを表現することがとても難しかったです。AISEの方々から柔道をとっても愛していることを肌で感じ、生涯を通して学んでいく柔道の面白さを、改めて気付かされた想いです。柔道を知らない子どもたちへも楽しさを伝えられる柔道家になりたいと思いました。

田中千裕さん

（体育学科3年・岐阜県鶯谷高校出身）

受験英語を駆使し何とか会話したり、技の名前などは日本語のまま（たとえば、寝技（NEWAZA））なので、技を教えたりする場では通じることができました。海外においては語学の大切さを痛感しました。今後は大学における柔道をしっかり頑張り、イタリア語も今後勉強してバリオーリ先生が書かれた本を読めるようになればと思っています。



AISEの選手と稽古をする田中選手

驚き、大学の治安確保に活躍する大学警察！ 遠藤教授のスタンフォード大学探訪



ZAVARA次席保安官と

米国カリフォルニア州サンフランシスコ市から車で1時間弱、そこに巨大な大学キャンパスが出現する。米国では、東海岸のハーバード大学と並ぶ、西海岸の名門校スタンフォード大学だ。

この度、現代武道学科で「警備制度の国際比較」を調査研究する遠藤が、米国の警察制度と民間警備業の実態調査の一環でスタンフォード大学を訪問した。まず、驚くのはそのキャンパスの広さだ。それは3310haと、本学の200倍の広さに該当する。そこに総勢約2万人弱の学生が学び、2000人弱に及ぶ教員が教育研究に携わる。これまでのノーベル賞の受賞者は実に58名に上る。

更に驚かされるのは、この広大なキャンパスには大学独自の警察とそれと一体的に警備組織が整備されていることである。それがスタンフォード大学公安局 SUDPS : Stanford University Department of Public Safety である。

日本では、公共の治安維持、社会の安全・安心の確保は警察という公権力に独占的にゆだねられ、個人や企業の民間ベースで生命・身体・財産の安全・安心の確保はそれぞれ自ら、又は、民間の警備業に委託して実施されている。

これに対し、米国では民間警察 (Private Police) が存在する。その一つの例が SUDPS の一部局”大学警察”だ。インタビューに応じてくれたのはスタン



フォード大学警察の NO2 スタンフォード大警察のパトカーの次席保安官 ZAVARA 女史だ。スタンフォード大学の所在するサンタクララ郡の郡保安官事務所との合意により、郡保安官の持つ警察権能がスタンフォード大学警察に付与されている。これにより、彼女は銃を携行して武装し、キャンパスで起きる殺人、強盗、窃盗、性犯罪、飲酒や麻薬問題、家庭内暴力、ストーカー犯罪などの捜査や防犯に取り組んでいる。勿論、その活動は警察車両であるパトロールカーにのって展開される。SUDPS のもう一つの顔が民間警備部局だ。キャンパス内の交通誘導、アメリカンフットボールなどのイベントが開催される際の雑踏警備などが主な仕事だ。このように SUDPS は警察機能と民間警備機能を有するハイブリット型の大学警備部局だ。その人件費や運用経費は全て大学が負担している。米国に根付く Self-help, self-protection の思想がそこに現れている。米国の警察と警備に関する研究には、その奥さを掘り出すことの必要性を感じさせる。

<寄稿：学長特別補佐 遠藤保雄>

2015東北こども博—仙台大学と船岡駐屯地との協定書締結式



朴澤理事長と腰塚司令(左)が固い握手を交わす
＝船岡駐屯地第2施設団長司令室

9月8日(火)、船岡駐屯地第2施設団長司令室で、本学と船岡駐屯地との「2015東北こども博」の連携協力に関する協定書締結式を行ないました。

締結式には、本学からは朴澤泰治理事長・西塚重良学生支援室長が、船岡駐屯地からは腰塚浩貴司令が出席し、朴澤理事長と腰塚司令が協定書を取り交わしました。

船岡自衛隊からは、東北こども博の初開催となった「2011東北こども博」より、来場者用駐車場の提供を受けています。また、「2013東北こども博」以降、地域連携企画としてロープワーク教室やジープ・偵察用バイク展示などのご協力を頂いています。

締結式で朴澤理事長は「2015東北こども博の成功に向け、協定を深めていきたい」と話し、「本学には武道と警護・警備を学び、社会の安全・安心に貢献できる人材を養成する現代武道学科を設置しています。自衛隊でもPRして頂ければ幸いです」と話されました。



2015東北こども博—10月11日(日)・12日(月・祝)に開催決定



2015東北こども博ポスター

仙台大学、柴田町、NPO法人東日本大震災こども未来基金等で構成される東北こども博実行委員会は、来たる10月11日(日)・12日(月・祝)の二日間、仙台大学キャンパスにおいて「2015東北こども博」を開催(仙台大学大学祭及びスポーツフェスティバルin柴田と両日同時開催)致します。

東北こども博は、「復興」・「笑顔」をキーワードに2011年10月からスタートし、今年で5回目となります。こどもも大人も、老若男女すべての方々に笑顔をもたらすようなイベントです。おもちや遊び、スポーツや音楽、アウトドアなど体験・参加できる楽しさいっぱいの2日間です。

入場は無料ですので、皆さまお誘い合わせの上、ぜひご来場下さい。

2015東北こども博 公式ホームページ
<http://www.sendaidaigaku.jp/kodomohaku/>

天皇杯サッカー2回戦・J1ベガルタ仙台に大善戦もあと一步及ばず



試合前の仙台大イレブン=ユアテックスタジアム仙台



途中出場のFW森村選手が1点差に詰め寄るゴールを決める

9月6日(日)、ユアテックスタジアム仙台(仙台市泉区)で、仙台大学(宮城県代表)がベガルタ仙台(J1)に挑んだ天皇杯2回戦。ベガルタ仙台は、仙台大学サッカー部出身のFW奥埜博亮選手(平成24年体育学科卒)とDF蜂須賀孝治選手(平成25年体育学科卒)が先発フル出場。仙台大学男子サッカー部は、最後の最後まで諦めずに戦い、ゴール裏のサッカー部員らも一丸となって声が枯れるほどに応援し続けましたが、追いつくことができず、2-3で惜しくも敗れました。

試合は、前半から本学が押し込まれる苦しい展開。前半9分、本学OBの奥埜選手に左足で豪快な先制弾を決められました。同40分には、ゴール前でベガルタ仙台のMF野沢拓也選手にフリーキックを決められ、試合はベガルタ仙台ペースで進み、前半を0-2で折り返しました。

後半は、本学が前線からプレスをかけ、ボールを奪い、ボールを前に出して攻める形を続けます。後半15

分、コーナーキックから本学のMF石川隆太選手(体育学科4年-栃木SCユース出身)が頭で1点を返して反撃。しかし、同27分にベガルタ仙台のDF菅井直樹選手にダイビングヘッドを決められ、1-3と突き放されました。そ

の後、同40分に途中出場の本学のFW森村公亮選手(体育学科2年-神奈川・横浜創英高校出身)がカウンター攻撃からゴールを決め、1点差に詰め寄り、本学のDF

山田満夫選手(体育学科2年-J1松本山雅出身-北海道・帯広北高校出身)やベガルタ仙台から特別指定を受

ける本学のDF榎本滉大選手(体育学科3年-群馬・共栄学園高校出身)らも攻め上がる猛攻を仕掛けましたが、大善戦もあと一步及びませんでした。

試合後には、ゴール裏の仙台大学サッカー部員から本学OBの奥埜選手と蜂須賀選手に対してのコールが沸き起こり、両OBは「母校との対戦は、やりにくい部分もあったが、楽しみだった。(コールは)いい先輩たちに恵まれ、嬉しかった。リーグ戦でもいい結果を残したい」と感激した様子で話しました。

本学男子サッカー部の吉井秀邦監督は「J1ベガルタ仙台が、ほぼベストメンバーで試合に臨んでくれたことに感謝している。うち(仙台大学サッカー部)は、力を引き出してもらったと思っている。チームの自信につながる非常にいいゲームだった。うちはベガルタ仙台との提携関係(練習試合やコーチ派遣など)で強くなれた。今後も、ベガルタ仙台と一緒に成長していきたい」と述べられました。

引き続き、仙台大学男子サッカー部への熱い応援をよろしくお願い致します。



左: OB奥埜選手(7)【右】が左足で先制弾を決める。

右: OB蜂須賀選手(4)【右】と競り合うMF高橋晃司選手(8)(体育学科4年-青森山田高校出身)。